

【資治通鑑書き下し解説・各巻】②

■資治通鑑第 148 卷 515 年～518 年 2022-1117 「北魏胡太后の称制、梁皇帝の寛容」公開

中国北部を統一した北魏は、跡継の皇帝が幼く、胡皇太后の称制となる。北魏では馮皇太后など、女性が政治を執ることが多かった。

一方南朝梁では、創業皇帝の寛容さが目立ち、魏晋南北朝時代では稀に見る安定感のある時代に突入た。だが武力の低下はその後の悲劇に繋がる。防衛力の欠如もまた怖い。

さて今日は岡山市観光ボランティアガイドの 25 周年記念式典で講演させてもらった。「岡山城天下取り物語」レジメを添付

今朝の山陽新聞に「備前軍記」の再版で判明した、戦国時代の「高原の道」の存在を書いていたので、早速パワポを改良して講演に望んだ。和気から金川、高梁、北房などを結ぶルートの成立の意義を語っている。それに絡めて、古代の交通ルートの変化や、近代の岡山と四国の交通路の変化なども語った。

古代の王でも戦国の大名でも、最終的に支配権を確立するためには、交易路の確保が重要で、従って古墳も山城も多くは交易路を約する所に築かれた。

そもそも人は言語を持ち、協力することによって猛獣や自然との闘いに勝利して文明を築いた。さらに言葉での伝達で知識を集約して農業を成立させた。文字の発明はさらにそれを加速させ、珍しい物に文化的価値を生じさせて経済を促進させた。

初期の王は市場の支配人が発達したものだし、戦国大名でも楽市楽座だの交易を上手くやった者が残った。戦争に強いのも、補給や農業とのバランス、交易利潤の追求が長期的には大きな要素となる。

中国の魏晋南北朝時代や日本の戦国時代は、戦乱の時代だから、「今だけ金だけ自分だけ」の世界で、「裏切り」も個人の利益を最優先するのが当たり前だったが、一方で毎日衆議院議員選挙をやって多数派工作をしているようなもの。そこではプロパガンダ技術が非常に重要だ。回り道でも理念や思想、文化の戦いになる。ウクライナ戦争なども、そういう眼で見ると、また違って見える。どちらが文化的勝利を得るのか、どちらもそういう能力には劣っているように見える。

僕は全ての戦争は経済戦争の究極だと思っている。今日の講演の最初で、「お金は全ての対立をほぼ解決できる、素晴らしい人類の発明品だ」と述べた。お金も、歴史を編纂も、町づくり、古墳もすべて、戦争しないための発明品だ。

■資治通鑑 150 卷 524 年～525 年 2022-1211 「北魏太后称制、六鎮の乱波及」

強大を誇った北魏は、平城から洛陽に遷都して以来、拓跋鮮卑の間でも、都と北鎮における者の格差が拡大し、遂に懷朔鎮などの六鎮で叛乱が勃発し、その乱は東西南北に拡大する。

広い中国を統一するのは難しい。元々いわゆる中原（河北・河南）、長安などの關中（陝西・山西）、海岸沿いの山東（山東・江蘇）、南京など（安徽・浙江）、武漢から荊州（湖北・湖南）、蜀の益州（四川）、南方（広東・福建・江西）など、また河西回廊の涼州（甘肅）、さらに北京から北の燕州（北京・遼寧）などの 9 くらいの集合体だ。「九州」という言い方もある。

だから北魏も統一が崩れ出すと、たちまち各地で独立運動が起こるわけだ。この 524 年ころも、旧燕国領域の營州（北京近辺）で叛乱が起き、その影響は朝鮮半島から倭国にもあったはずだ。そうした中国本

土の状況も見ていかないと、日本史は語れない。筑紫磐井の乱なども、影響があったかもしれない。なんせ中国本土やシルクロード・草原の道との交易ルートに激変があったわけだから、交易の利害は複雑に変化するはずだ。

「戦争とはすべて、経済戦争の一側面である」と僕は思う。宗教戦争といわれるものも、その背後にはかならず経済的利益の相克がある。

■資治通鑑 151巻 526年～527年 2023-1224

北魏は六鎮の乱以降、全土で叛乱が頻発、今の北京周辺では杜洛周、葛榮が反し、また降伏した流民団の鮮于修禮が決起。山西では爾朱榮が自立の動き。西部では莫折念生が席卷。しかしどの勢力も長続きせず。一方、南の齊の王族・蕭寶寅は梁建国時に北に逃げて、北魏の武将として活躍していたが、潼関を抑えて關中に自立の動き、遂に皇帝を称する。

また南の梁は屢々混乱する北魏を攻め、壽陽を回復し、皇帝の蕭衍は仏教に深く帰依して、ついには「捨身」つまり身を捨てて多額の寄付を行う。

ちょっと中央の力が衰えると、古来の文化圏を反映して、7つくらいに分裂するのが中国本来の姿ともいえる。

■資治通鑑第152巻 528年 2023-1228 「爾朱榮の河陰の乱」

北魏は我が日本の古代律令国家のモデルともいべき国だ。遊牧民族の鮮卑の拓跋氏が中国の北半分を統一、やがてその流れから隋唐帝国が成立していく。

さて北魏の1-9代の皇帝のうち、なんと2人は皇太子に殺され、2人は引退した皇后すなわち皇太后に殺される。中国史上女帝で即位したとされるのは則天武后のみだが、清時代の西太后だけでなく、実権を握った皇太后というのは結構ある。

特に有名なのは第5代高宗文成帝の馮皇后（文明皇后）で、彼女は滅ぼされた北燕皇族の流れだった。高宗没時には自決しようとしたといわれるが、その次の顛祖献文帝を暗殺したと言われていて、その子の高祖孝文帝の時代には臨朝奉政、すなわち摂政を行ったとされる。

ただこの時孝文帝は馮皇后の子とはされていないが、実は子なのではないかと言われる。馮皇后については、テレビドラマにもなっている。

孝文帝は馮皇后死去後ようやく実権を握り、首都を平城から洛陽に移す。なお馮皇后時代には、いわゆる日本の班田収受の法のもとが確立される。

さて528年に同じく肅宗孝明帝を殺した靈皇太后は、同年爾朱榮に河陰の乱で幼帝と一緒に黄河に放り込まれて殺される。それまで放蕩淫乱し、既に六鎮の乱で乱れた北魏は大混乱におちいつていた。

こういう混乱状態になると、北京周辺と洛陽周辺、長安周辺、河西回廊周辺に政権が自立しようとする、それが中国だ。

■資治通鑑第153巻 529年 2022-1231 「元顛の洛陽占拠、蕭衍無遮大會」

北魏は各地の内乱、それを突いて南朝梁に亡命していた王が傀儡政権を作ろうと洛陽を落す。しかし結局爾朱榮がまた洛陽奪還。

さてここまで 69 巻から 153 巻まで 86 巻の原典 89 万字を注釈付で直訳 187 万字、400 字原稿用紙 4675 枚、A4 で 1170p くらいを公開。

印刷版も出したいが、膨大すぎてどうやるか悩むが、毎日 10-40 人は見ているから、ヤツタ価値はある。出てくる地名は膨大な数だが、Google Earth で検索して地図に落とし込んでいる。ただたとえば黄河の位置なども現代とは変わっているのだが、「中国前近代の関津と交通路」という専門書を手に入れて、大変に勉強になった。論文はあれこれあるが、こうした基礎的解説書が意外に少なく、あってもなかなか高く手が出ない。けれども見つけたら買っておかないと、なくなるかも。図書館などには絶対に無い本ばかりだ。吉備邪馬台国東遷説を書く場合にも、こうしてため込んだ本が役立った。

黄河の位置は以下の図がわかりやすい。また南朝宋の都の南の水路「破崗瀆」の解説は、江南の流通経路や政治状況を考える上で非常に参考になった。

■2023-0104

楯築と造山古墳と鬼の城は関係があった！

吉備邪馬台国の痕跡は、日本書紀編纂時に消された。

斉明天皇は天宮を吉備に作った、田身嶺（たぶのみね）が総社の鬼の城だった。楯築の鬼道は、後漢蜀の道教的五斗米道などの流れ。

造山古墳は楯築が倭王墓だった事を意識して、隣の丘に築いたかも。そして、それを見下ろす位置に鬼の城は築かれた。

さて、鬼の城縁起を書いたのは鎌倉時代の柴西、吉備津神社の神官である加夜氏の出身、即ち吉備津王家の流れだ。だから、楯築と鬼の城が同じ物語に語られたかも。

とまあ、今日送られてきた吉備邪馬台国研究の東京の平山牧人さんの仮説を、忖度してさらに膨らませてみた。

吉備には楯築王、卑弥呼、造山王のすくなくとも 3 人の倭王がいて、古事記は全部隠さなかったが、日本書紀は隠して暗号を残した。謎解きゲームを仕掛けられていたらしいぜ。考古学では分からない部分も、日本書紀を書いた連中と同レベルの漢文の知識で解けるかもしれない。

■資治通鑑 155 卷 531 年～532 年 2023-0122 「高歡は爾朱氏を鄴に撃破」

北魏をグタグタにした爾朱氏は高歡に破られ、益々ぶれつへの流れは加速する。南朝の梁の蕭衍は丸々 7 日間も同泰寺にこもって、法座に乗り、「涅槃經」を講じること何回も。しかし北魏の弱体化に乗じて、北魏の亡命王族に兵を付けて介入を計ったりもする。ただ軍事力の点では北が強い。

■資治通鑑 156 卷 533 年～534 年 2023-0202 「北魏分裂、東魏高歡と西魏宇文泰」

北魏は軍閥の争いの末、孝武帝が長安の宇文泰の所に逃げ込み、高歡は別に皇帝を立てて東魏を建て、鄴に遷都する。それぞれ戦いに敗れた者は、皆南の梁に逃げ込み、三国鼎立のような状態に陥る。この西魏からやがて隋、唐と繋がっていく。

■資治通鑑 157 卷 535 年～537 年 2023-0210 「東魏・西魏・梁の三国鼎立と攻防」

5 世紀に中国北部を平定した北魏も、東西に分裂しそれぞれの宰高歡、宇文泰は知略・戦略ともに譲らず、

攻めぎ合う。一方南朝の梁の蕭衍は、仏教に入れあげて政治は安定するものの、北に比べて次第に戦力を減じる。

医学者・科学者であり、道教の茅山派の開祖の陶弘景は死の直前、「豈に悟らんや昭陽殿、遂に單于の宮と作らんとは！」と、建康が北方遊牧民族の單于に占領されると予言する。

■資治通鑑 158巻 538年～544年 2023-0226「東魏高歡と西魏宇文泰の死闘」

北魏が分裂して、鄴に都する東魏の高歡と、長安に都する西魏の宇文泰は、互いに自ら軍を率いて、洛陽周辺と長安周辺で相い攻伐する。それぞれもうダメかという場面があるものの、どちらも攻め切れず、逃げるときにはそれぞれ叛乱にさらされる。

東魏は南の梁とも再々使節を派遣し合い、梁は安定しているが、南の今のベトナムでは中国風の独立政権が出来ようとする。平和に慣れた南朝梁の蕭衍は、相変らず仏教に入れあげ、阿諛追従する徒に囲まれている。

東魏の侯景はいよいよ武将として力をつけ、また梁の南部ではいよいよ次の王朝を開く陳霸先が登場する。

■資治通鑑 160巻 547年 2023-0316「高歡死して侯景の叛乱、三つ巴」

東魏の高歡が死して、後継の高澄とそりのあわない侯景は、河南13州を挙げて叛乱を起こし、最初は西魏を頼るも、南の梁にも使者を派遣する。もともと武将としての能力が高いわけでは無く、策略で世渡りしてきた侯景の悪知恵は世に冠たり。梟雄と言えるかもしれない。

東魏の高澄はなんとか高歡の後継として固めるが、東魏皇帝との間は緊張し、皇帝が高澄に叛乱を企てるが発覚し、側近を殺して収める。そしていよいよ慕容紹宗を派遣して侯景を攻めさせる。

侯景をめぐり、東魏・西魏・梁を含めて四巴ともいえる抗争が始まる。

こうした中国本土の大混乱に乗じて、北では突厥が勢力を拡大し始めるのだが、朝鮮半島や倭国に対する統制もゆるくなり、交易路は混乱したはずである。日本史を見るのに、地政学的に中国大陸の歴史を押えておくことは、とても大事だ。現代でもこの資治通鑑に出てくる中国人の物の考え方は、非常に参考になるはず。

■資治通鑑 161巻 548年 2023-0403「侯景の亂で建康大混乱」

東魏の高歡死して高澄が丞相となるに及びて、策略に富む侯景は遂に東魏に叛き、初めは西魏に附こうとするも見破られ、梁の蕭衍に付く。しかし東魏の反撃に会い、大敗北して壽陽に逃げ込む。

だが巧妙な高澄は梁との和睦に持ち込み、蕭衍もまた侯景の軍がたった八百に過ぎないことから見くびり、講和を結んでしまう。窮鼠となった侯景は、梁の不満分子の蕭正徳を味方に引き入れ、輕騎にて建康（今の南京）を急襲し、建康の南の秦淮河を突破して台城を包囲する。

侯景は攻城具を使い、また土山を築き、焼き壊す凄惨な戦いになる。また東西から梁の王族が救援に入るも、どちらも決定打が無く、そのうち梁側のキーパーソンの羊侃が死す。

仏教にはまり、度々捨身する梁の皇帝の蕭衍の政治は甘く、太平を貪る中で、戦乱相繼ぐ北朝に比べて軍事力は弱まり、名将は死に絶え、建康は急襲されて、馬に驚き、矢に怯える王族では支えきれなくなっていた。

■資治通鑑 162巻 599年 2023-0412

東魏から南朝の梁に亡命した侯景は、追い込まれて叛乱を起こし、建康（南京）を包囲。双方食尽き、侯景は偽装講和し、四方の救援軍は至るも、個別に撃破され、それぞれが形勢観望して、遂に台城は落ちる。自らクーデターを起こして梁を立てた蕭衍は老い、状況を見誤り、遂に餓死に追い込まれる。侯景は呉興方面にも軍を出す、梁の西方面では諸勢力が入り乱れ、東魏・西魏が触手を伸ばし、梁は四分五裂の感あり。

一度統一が失われると、人の心はすさみ、たちまちのうちに飢饉がやってくる。平和か大事だというのは、どの時代も戦争は食糧危機に繋がるからだ。

■資治通鑑 163巻 550年 「侯景と蕭氏・北周・西魏の乱戦」

南朝梁の都の建康を大混乱に陥れた東魏出身の侯景は、軍勢力絶対では無かったが、それ以上に平和ボケした南朝の諸侯は、形勢を観望し、各地で牽制し合うのみ。そこに東魏を篡奪した北齊の高洋、西魏の宇文泰がからみ、お互いに亡命し合う妙な事が続く。

一方、南海方面からは次の陳朝を立てる陳霸先が攻め上る。

■資治通鑑 165巻 553年～554年 「西魏は江陵・蜀を攻略」2023-0512

北魏が分裂して東魏・西魏となり、東魏は高歡一族が篡奪して北齊となる。この時期の皇帝は高洋、ようやくその残忍さがあきらかになる。

一方、西魏の宇文泰はまだ健在で、東魏より軍事的に弱小であったが、富国強兵に勉める。

南朝の梁は、東魏から流れてきた侯景にズタズタに切り裂かれ、侯景の討伐に成功したものの、蕭繹は建康でなく荊州の江陵で即位する。そこへ蜀にいた蕭紀が江陵に攻め上る。そこで蕭繹は西魏に援軍を求め、それに乗じて宇文泰は尉遲迥(うっちけい)を蜀に派遣して占領。蕭紀は押し出されるように蕭繹と戦い、敗れて滅亡。そこに西魏が侵入してついに、梁の江陵の蕭繹は殺される。

だが建康(今の南京)は健在だったので、王僧辯、陳霸先等は共に江州刺史の晋安王の方智を奉じて即位させる。この時期、分裂する梁に北齊は何回も傀儡政権を立てて攻め込もうとするが、失敗する。

西魏は江陵に梁の王族の蕭察を立てて傀儡政権、後梁を作るが、此の時、梁の人民は大量に奴婢として長安に連行され、その時の模様は顔之推の「顔氏家訓」に詳しい。

■「資治通鑑」第166巻 555年～556年 2023-0526 「後梁・北周の成立、宇文泰没す」

資治通鑑では、この時代のような戦乱の時期には、記事が多くなる。平和なときは4年1巻とかの時期もあるが、1年1巻とか、2年1巻とかになる。

軍隊が活動し、戦争になると、誰が一番首を取るか、誰が一番手柄を挙げたかが重要で、それによって恩賞が決まる。そしてこの時軍隊には「監軍」がいて、武将の手柄を見て記録していくはず。この時代には既に紙が普及し、文字で記録されていただろう。記録が多いから、現代にも様々なエピソードが残る。

「監」という漢字は現代でも、「監査」とか「監事」という言葉で残っている。

南朝の梁は侯景の乱でバラバラになり、各地に諸勢力が乱立する中、陳霸先などの活躍で侯景を討伐し、蕭繹が江陵で皇帝に立つ。しかし北齊と西魏は様々画策し、それぞれ亡命してきた梁の王族を立てて南に

傀儡政権を立てようとする。

西魏は蕭繹を滅ぼし、後梁を立てさせるが、梁の建康では、実力者の王僧辯が北齊の送り込んだ蕭淵明を皇帝に立てる。だが陳霸先は反旗を翻し、皇帝を差し替え、次第に実力を蓄え、建康に迫る北齊をかりうじて撃退する。

北齊の高帝の高洋はなかなか出来のいい皇帝だったが、気分で群臣をむごたらしく殺害し、死体を解体するなど、史上に残る残虐さだった。だが政治は楊愔に任せ、よく治まった。高洋の政治は「上に昏く、下に清し」と言われた。

西魏の英雄・宇文泰が亡くなり、実権は宇文護が持ち、北魏以来の拓跋氏政権から禅譲されて「北周」が成立する。古代の周王朝に倣うという意味だ。

■「苻洛は応神天皇に変身、造山古墳を造営」2023-0515

吉備の造山古墳は応神天皇陵ではないか、とは平成4年に書いて広島財界誌に連載された小説「勾玉の首飾り」以来の見通しだ。平成26年に書いた「吉備邪馬台国東遷説」でも補強して執筆した。実は私は小林恵子の「興亡古代史、東アジアの派遣争奪1000年」をボロボロになるまで熟読し、日本の万世一系とされる天皇の一部は、朝鮮中国から渡ってきたであろうと確信を持つようになった。

小林恵子は、ほぼ全ての天皇が渡来系だとするが、そこまではいかないまでも、大陸の知識人や技術との格差は大きく、今日で言えば最新の金融技術を持った投資ファンドの連中が、財界の一部を席卷したり、官僚出身者が極めて当たり前、知事や市長になるようなものだとも言える。また日産のゴーンが最強の経営ノウハウを持って社長に就任し、一世を風靡したが、結局自身の腐敗をきっかけに失脚し、土着の日産勢に追い出されたような事が、古代に於いても頻繁に起こっていたはずだ。

あるいはまた、東大卒の地元出身者を担いで、市長や知事や代議士をやらせるなんてのも、また優秀な婿を取って会社を継承させるのも、どの時代でもあること。「地縁」「血縁」あるいはまた「地盤」「看板」などというものも、人間社会では当然あり続けたわけで、古代も現代も変わりはない。そういう目で古代を見れば、資料に現れない蓋然性にもう一度スポットライトを当てるべきだ。

因みに、日本書紀に出てくる古代の天皇のうち、応神・雄略・欽明の三天皇については、大陸・朝鮮半島との関わりが多く記述され、渡来人と考えて仮説を立てることは、そんなに無理では無いと思っている。この考察ではまず、前秦の苻洛が応神天皇に変身し、吉備の造山古墳を造営したとの仮説を述べたい。

■2023-0504

前秦の苻洛は倭国にやって来て、応神天皇になったねという小林恵子の説を検証するため、資治通鑑の翻訳に取り組んで4年半。造山古墳が応神天皇の墓なら、必ず遊牧民族系の遺物が出てくるはずだが、今秋6日の吉備反乱シンポでの講演のパワポを作成中。

ところで、苻洛の祖父の蒲洪は、讖文に「草付応王」にある、つまり「蒲という姓を苻にしたら王になれる」とのことで苻と説明する。小林恵子は、応神とはそこからきているとする。漢風諡号は奈良時代の淡海三船が付けたというが、かれは「草付応神」として苻洛に名付けたわけだが、さてさて。ともかく、こんな話は資治通鑑を丹念に読んでりゃ、普通に出てくる。

蒲洪—苻健—苻堅（376河北統一）

苻堅は351年に「大秦天王」と名乗る、天王とは周の時代にも出てくるが、これ頃、遊牧民族系王朝で

は、皇帝の名乗らずに天王と名乗ることが多い。まあ準皇帝という意味なのだが。ここで魯維持する→大秦・午頭天王を思い出してします。

前趙の劉淵は匈奴で自立した 318 年に漢天王を名乗る。匈奴の劉氏は漢に征服されたとき、漢の王室と通婚して劉と名乗った。だが同時に匈奴の禪于でもあるので皇帝と名乗れなかったという事情もあるらしい。以下、天王の例は五胡十六国時代に続く。

後趙 330 趙天王（石勒・羯）、翟魏 392 大魏天王

後涼 396-403 大涼天王（呂光・氐）

後燕 400-407 庶民天王（慕容氏・鮮卑）

北燕 407 大燕天王（高氏高句麗・馮氏漢族）

夏 407 大夏天王（赫連勃勃・鉄弗匈奴）

もし苻洛が倭国にやって来たとき、天王と名乗っていたら、其の後日本で天皇と名乗るベースになったのではないかと思う。

■2023-0306

様々一段落して、天気もいいので、倉敷の岩倉神社と楯築遺跡、造山古墳を回ってきた。

岩倉神社の石を丹念に見てみたが、これ単なる露岩でなく、

石材を取っていたんだなと気がついた。薄く割った岩は、横穴式石室の天井石に最適なんではないかな。

東向の神社の下には、楯築のような立石があるが、中山茶臼山古墳古墳を指しているかも。

RSK バラ園前の上東遺跡の道路に、波止場状遺跡に因んだ、船が 3 隻、歩道にあるのに気がついた。

楯築では初めて神社の参道側からアプローチ、自転車を担ぎあげた。周囲の石を見て回ったが、頂上付近の大きな石がふたつ、これは頂上に立てられていたのではないか。よく見ると、あちこちに河原石があるね。

造山そばの千足古墳はほぼ本体工事がおわり、解説板や埴輪も並び終えていた。5 月の連休のオープが楽しみだ。

造山古墳の少し外側からぐるりと一周しながら、中国からやってきた応神天皇が、吉備の入り婿になり、ここに葬られたとしたら、小林恵子説ならば、次の仁徳天皇は高句麗好太王で、応神を撃破して倭王になり、同サイズの古墳を築くことにより、倭王の権威を表した、それが大阪の石津ヶ丘古墳でことになる。遊牧騎馬民族系の倭王は、入り婿になり、倭国伝統の前方後円墳を作ったという仮説だ。雄略天皇もそうした一人で、大仙古墳がそうだろう、とまあ一応妄想としておくが、4 年半も資治通鑑翻訳しているのは、雄略天皇が慕容氏系の仁徳天皇の血を受けて、また北燕の馮跋の血も受けて、百済経由で倭国に渡来したとの仮説を追いかけている。

今年造山が発掘されれば、新たに遊牧騎馬民族系の物が出土するに違いないと期待している。日本史が変わるよ。

■2023-0303

南朝梁の武帝・蕭衍が、側近の諫言に対して、反論した文の一部。

「若し復た此を減じれば、必ず《蟋蟀(しつしゅつ) (こおろぎ)》(詩の唐風に蟋蟀の篇有り、晉の僖公が儉約に過ぎて禮位に中らないを指す) 之譏り有り。」

余りに儉約しすぎると、こおろぎと言って、誹られたのだよ、古代においても。西暦 545 年だねえ。